

名古屋大学柔道部優勝への軌跡

去る9月6日日曜日、15年ぶりの七帝戦優勝を祝い、名大柔道部に多大な御支援をいただいた方々をお招きし、盛大な七帝戦優勝報告会、謝恩会がホテルグランコートで催されました。この数年間、合宿、出稽古で胸を貸して頂いた実業団の方々、名大主催の試合・合宿に御協力いただいた諸先生、現役部員の高校時代の恩師、柔道教室でお世話になった先生方、さらに名大道場で部員とともにも練習でともに汗を流した方々、さらに現役部員の御両親をお招きし感謝とともに優勝を喜び分かちあっていたりいただきたく主催したものです。

会は発起人あいさつ、発起人でもある濱口名大総長、河村名古屋市長、高橋主将の高校時代の恩師の貝沼先生のお話等、七帝戦ビデオを背景に楽しく進みました。



七帝戦優勝は現役部員、とくに4年生幹部にとっては人生の最高の宝物、これからの人生で間違いなく大きな自信となるものです。将来苦難に遭ったとき、この1年間の練習、七帝戦の経験が大きな支えとなると思います。また指導陣にとっても部員に大きな贈り物ができたという喜びでもあります。名大柔道部を信頼し御子を預けていただいた御両親に感謝とともに成果を自信をもって報告できると安堵感もあります。勿論部員が努力の末勝ち得たものですが、この会でこの優勝が支援、協力いただいた方々があってこそそのものと改めて感じ入った次第です。150人以上の列席者、さらにお呼びできなかった方を考えれば大変な数の方々にお世話になりました。今後とも名大柔道部に変わらぬ御支援のほど宜しくお願い申し上げます。

甚だ偏った見方になっているかもしれませんが優勝までのこの1年の軌跡について述べてみます。

6月七帝戦後、高前主将以下選手14名が残りその底上げを図ればマイナスはないとはいえ最下位から優勝を目指す訳ですから優勝を口にするにはちょっとおこがましいといった状態でした。試合直後の米田柔整への出稽古の際の新幹部との話し合いのあたりの危機感は相当なものでした。ただ直後の試合結果は東海国立大戦で柔道推薦が主力である岐阜大を破っての優勝で波に乗る良いチャンスとなりました。その1週間後に新人戦があり、翌日の東京での全国国立大戦は当初参加見合わせとの現役の意向も高濱師範の叱責で強行参加、夜行バスでの移動というハードスケジュールとなりましたが、全国国立大ベストエイト、筑波大学には負けたものの全国レベルの大学と公式試合ができたということは30年来なかったことであり部員一同の自信となりました。その後はいつものごとく関東名柔会にご馳走していただきました。さらに7月は知多柔道教室（会長伊藤寿治先生）で二村師範、高濱師範が指導、宣伝もかねての将来の部員確保としました。会場では故小坂光之介前師範のビデオが映されていました。このあとは記録的な猛暑となりただでさえ日本一蒸し暑い名古屋、屋根はあっても天井のない名大道場での練習はサウナ風呂で練習するようものとなりました。いつもこの時期七帝戦があれば名大有利間違いなしです。もちろん例年のごとく試験休みなしとし練習時間を部員全員が参加できる時間帯に変更としました。試験明けの8月上旬の高校生合宿では東京理科大数学科教授の佐藤先輩、河合塾漢文の人気講師の片桐先輩、助っ人の東大柔道部鏡先輩に講義をしていただきました。片桐先輩の受験参考書無料配布のおまけつきでした。高校生は名大山の上の合宿所に泊まり食事は山田菜穂子先輩に協力していただきましたこの合宿で過去、現部員の中川、中ノ森、平野をゲットした実績があります。このあと30年続く恒例の若狭合宿、盆休み。

練習再開は金沢学院大学合同合宿への参加でした。名大の柔道はそのスタイルに慣れない初めての相手には結構通用するというのを再認識しました。この合宿では女子で全国レベルの選手がおり名大女子部員には大いに刺激になったと思います。特に女子部員の練習後の綱のぼりが印象深いものでした。個人的には高濱師範に紹介していただいた鎮西高校柔道部の後輩のお店で柔道談義に花が咲き、その中で鎮西の練習に比べれば相撲部屋の

稽古の方が楽であったとの言葉が印象的で名大が練習量が決定する柔道やっているのか自問してしまいました。

9月となり自分は参加できず残念でしたが京大主催の寝技講習会、締めは高濱師範の南阿蘇道場開きをかねての熊本遠征でした。石川先生、瓜谷部長マイクロバス運転での往復でした。初日は鎮西高校での稽古、熊本大学との練習、高濱道場開きで秋本先生から背負い投げの指導、鮫島先生から大外刈りの指導していただきました。さらに御近所の方々から大変な歓待を受けました。部員のほとんどが阿蘇は初めてであり、自分も初めてでその雄大な風景には魅了されました。鎮西高校の名選手の写真を飾った道場、嘉納先生が開いた伝統の熊大道場、最後に益崎先生の御厚意で熊本県下の高校進学校生徒を集めての済々こう高校での柔道教室と盛り沢山の内容となりました。この時の名大柔道部員の服装、態度が高校生のごとくであったと先生方から好評でした。

更に新たな取り組みとして名大柔道教室も開催し部員確保、広報に長期的視野もふくめての催しも始まり部員も含めて例年以上に練習外で忙しくなりました。

秋となり滋賀大戦は軽く一蹴したものの京大戦を控え前年度よりは乱取り等明らかに本数は増えてはいるもののまだ足りなく感じられました。昭和50年当時の練習量を1とすれば野口主将で優勝した頃の昭和50年代後半から60年頃は2、この10年間は1.5、このときは1.8という印象で例年よりは多いもののまだまだで、これで優勝を口に出せるのかといった感じでした。この時期中川の実力がダントツでスタミナ十分、6分より8分、制限時間なければ絶対に取りれるという自信を持って京大戦に臨みました。中川の活躍はあったもののまさかの敗戦で各試合でポカもなく敗れた、実力通り敗れたといってもいい内容でした。優勝からもっとも遠のいたと感じた時期でした。結果としてこの敗戦が **turning point** となりました。高濱師範の指導が厳しくなり、乱取り8分、本数増加、抜き役同士のぶつかり稽古、亀禁止、二重がらみ禁止、つねに動いて攻勢をとること。研究も下級生主体の技を伝える教科書的なものから実戦に即したものに方向変えとなりました。このあと中ノ森は股裂き守り、亀取り対策から返しを覚え急速に寝技が強くなりました。

年が明けも冬場の練習は京大戦の敗戦以来の厳しい練習が続きました。この時期中ノ森、黒木の伸びが著しいものがありました。私事で恐縮ですが京大戦前黒木にはまったく取られる気はしなかったのが8分乱取りで6分過ぎにはじめて取られてからそれを契機にまったく歯が立たなくなりました。壁を乗り越えた瞬間なのでしょう。さらに4年全員、高橋、佐藤、黒木、水谷が強力な下級生の存在と、お互いのライバル意識に火がついたのか乱取りの質がグングンアップしました。当然のごとく冬の試験休みなし。

3月を前にして高橋の2部練計画発表は、この10年間実行さされたことはなく当初危ぶんでいましたが実行に移されました。県武道館へも出稽古もあり。成果は早くも京都武徳殿での錬成試合で現れました。残念ながら自分は仕事のためみることができませんでした。結果はすばらしいもので名大の進歩を他大学に知らしめました。勝ちパターンはスタミナのあることを証明しており冬場の練習方針が誤りでなかったことが証明されました。この直後には名大招待試合と息つく暇のないスケジュールでした。この試合は短期的な選手

確保、今後の選手獲得のためにも進学校の柔道部顧問の先生方と親しくなる最高の機会としての位置付けで1年中止後瓜谷部長が renewal したものです。

冬からこの間、河合先生の御厚意で桜丘高校での高校生合宿への参加、刈谷柔道会、トヨタ実業団練習会参加等、以前に比し練習試合はすくないものの出稽古の機会は増えました。逆に過去2年間合宿をさせていただいた豊田自動織機の柔道部員の方々、三菱重工名古屋柔道部、名商大柔道部と名大道場に來ていただきました。

4月、有望な巨漢1年3人も入り、連休5月3日のOB戦は何十年ぶりかで現役組が勝ち、名阪戦は今度は予想通り圧勝し、このあたりからOBから名大七帝戦優勝の掛け声が声高に騒がれ出しました。練習量は明らかに量が増え質もアップしました。ヒコーキの台となると後半、亀でしのいで引き分け、あるいは負けの連続となるのが普通との認識でしたが、当初は最後まで勝ちっぱなしは中川1人だけで驚異的なスタミナと思っていたのが抜き役全員がヒコーキ最後まで攻め続けられるようになりました。以前から亀はやるな、しかしかめ取りは必須といわれ続けてきました。亀が得意な選手がいなければ亀取りが上手になれるのか矛盾する言葉ではないかと考えていました。名大に関する限り、結局亀をするという行為がスタミナをつかせない原因、楽をするというであったということが当たり前とはいえ事実としてみることができました。この頃のヒコーキでの佐藤と黒木の対戦は死闘といえるほど激しいものではたでみていて涙が出てくるほどでした。この時期になって瓜谷部長に過去30年間でスタミナは過去最高、レベルも過去最高、野口久留宮時代よりも上ではないかといったところ同意見であった。二村師範も同意見であった。秋の1.8の練習量が3となっていた。さらに七帝戦近くになってヒコーキで高橋主将が中川に取られなくなって目星がついたという思いでした。一方この時期三菱重工名古屋に出稽古でお世話になりましたが同じ相手とやっているにもかかわらず日によって内容が全然違ってくることをみてメンタル面で不安を覚えたのも事実です。ちなみにこのときご馳走していただいた鰻井、から揚げを平らげる現役部員の大食には驚きました。毎週金曜日夜の県スポ(4月、5月は手羽先山ちゃん)での柔道教室あとのとんかつ屋での大食いにも驚かされました。とんかつ一切れでご飯山盛一杯食べられる胃袋に驚嘆しました。この飽食時代にどんぶり5、6杯食べていました。店屋もあらたにご飯炊いていたとのこと。ちなみに私と小3の息子は各2杯でした。

七帝戦間際となってきて高濱師範、二村師範の口から優勝という言葉がでなくなった一方で周囲の優勝の掛け声はどんどん大きくなっていきました。自分も目の前の優勝がなんのはずみか手の平からぼろりと落ちてしまうのではという不安感が強くなり軽々しく優勝とは口に出せなくなりました。この時期優勝と口に出していた高橋主将はえらいのかな？いつも脳裏に浮かぶのが30年前、優勝最右翼の進藤主将の名大が決勝で北大に負けたとき、当時の京大柔道部部長であった児島先生が北大の3年連続決勝で負けた悔し涙の差という言葉であり、優勝に値する練習を入学時から選手全員がしているチームが優勝できるということ、すなわち練習量の総和がマックスのチームが優勝すると解釈すると我々が優勝に値する練習をしているのか。この思いは最後までぬぐいきれませんでした。同時に背

水の陣で1勝した小椋主将の時を思い出さずにはおられませんでした。種播く人が収穫を得られるのか。

七帝戦前日、名大は経験のないチームなので完全優勝でなくともなんとしても優勝するためには優勝候補の東北大とは一度はあたらなければいけないので当たるなら初戦、かりに初戦に負けたとしても敗者復活で調子をあげて特に分け役陣に自信をつけさせて再戦できるのがベストという考えをおおっぴらにはいえず大蔵コーチにこっそり話した。京大9連覇当時、名大は初戦で一度も京大にあたらず、京大に負けてその年はおわりとなっていた苦い経験もありました。くじはずばりで内心やっと思いました。名大は敗者復活から勝ち上がり東北大再戦で勝ち決勝は水ももらさぬ試合で勝ち優勝しました。

1年間に軌跡といっても個人の印象中心で偏った見方と思われれます。この1年間の練習は現役部員の人生の記念碑となるものです。名大柔道部が与えることができたという点で御両親には胸の張れる結果となりました。個人的にも悔し涙の3年という言葉の呪縛から解放されました。

こうやって1年間の活動を書いてみると誠に多くのひとびとに支えられ活動できたことが実感されます。七帝優勝、世間一般のことでいえばちっぽけなことですが、部員一同、特に高橋、佐藤、黒木、水谷の4年幹部には人生の自信のもとになるものです。花見桜の下で酔って怒れる高をなだめたこともいい思い出となりました。七帝優勝で許してもらえましょう。部員が授業料も高くなり、しかしアルバイトもできず柔道に集中できたのも御両親に理解あつてのこと。名大道場、内輪だけではとても優勝は無理であったこと。出稽古で胸を貸していただいた実業団の方々、ともに名大道場で汗を流した学外の方々、名大柔道部の活動にご理解協力支援いただいたの方々あらためて感謝する次第です。



小川明男 記